

木質文化財研究会（見学会）の報告

秋田県立大学木材高度加工研究所
辻村 舞子

第 68 回日本木材学会大会（京都大会）は、3 月 14 日（水）より 3 日間の日程で開催され、最終日 16 日（金）の午後は、各部門において研究会会合が開かれました。木質文化財研究会では、京都大学大学院農学研究科森林科学専攻の藤井義久先生をはじめ、総勢 6 名の参加者にて、京都市内にある 1. 西本願寺飛雲閣の屋根葺き替え作業現場と、2. 公益財団法人美術院国宝修理所の見学に行き参りました。桜の花が咲きほころびそうな春めいた陽気から一転、当日の天候は時折小雨のばらつく曇天となりましたが、無事に見学会を終えることが出来ました。簡単ではありますが、それぞれの様子についてご紹介したいと思います。

一か所目の西本願寺飛雲閣は、金閣寺、銀閣寺と並んで「京都の三名閣」の一つとされる建物で、江戸時代前期寛永 13 年（1636 年）の頃、寺独自の所有物として建立されました。建築様式は三層からなる楼閣構造で、茶室や浴室（蒸気風呂）を備えており、当時は西本願寺に招かれた客人をもてなすために用いられた、言わば「ゲストハウス」としての役目を果たしていたそうです。明治 30 年（1897 年）に重要文化財として、昭和 26 年（1951 年）に国宝として指定を受けました。屋根の葺き替えは 20～30 年に一度の周期で行われており、今回は平成 5 年に実施されています。京都府文化財保護課の方の解説の元、建物の各層をじっくり見学させて頂きました（写真 1）。また、お伺いした時は、屋根板の葺き替え作業の最中で、宮大工さんらは、サワラで出来た長方形の板（長さ約 30 cm、厚さ 3 mm）を手早く選別しながら屋根下地の上に張り合わせ、リズムカルに竹釘を打ち込んでおられました。所作があまりに美しかったので、思わず自分のスマートフォンで動画を撮影してしまったほどです。機械化・AI 化が進む昨今ですが、「伝統的な手法をそのままに生かしていく」という、文化財の修復に対する日本の考え方も感じ取ることが出来ました。飛雲閣の屋根の葺き上りは 2018 年 12 月頃、また、全体の修復事業は 2020 年 3 月に完了が予定されています。

二か所目の国宝修理所は、JR 京都駅北口より徒歩 15 分程度、NTT 西日本の建物の隣に位置しています。こちらでは、仏像や文化財の修理が行われており、1 階が事務所、2 階より上階が修理作業場となっています。今回特別に見学させてもらえることになりました。作業場は広々とした明るい畳の部屋で、技術職員の方々が仏像と対面しながら黙々と作業に取り組んでおられました。技術部代表の方よりまずお話を伺ったのは、仏像修理に関する工夫です。オリジナル部分と修復部分を区別可能にするべく、修復箇所にはあえて本物と違う樹種（ビシュウヒノキ）を使うのですが、万が一説明書が紛失した場合でも後世の修理技術者が対処できるようにするため、だそうです。続いて、仏像の修理に利用される丸太の選定事情に関する悩みをお聞きしました。全国的に大径木の数が少なくなっているため、修理したい仏像に合わせて適したサイズの丸太を選ぶという手順を踏むことが難しく、丸太のストックを調べてそこから修理できる仏像を選ぶ、というのが現在の主な段取りになっているそうです。最後にお伺いしたのは、モデリング（型取り）用に使用されているアキニレの粉末の不思議についてです。文化財の修復には、「昔からの慣例で行っているが、どのような科学的根拠があるのかは不明である手法」が数多く使われている

ようですが、これもその一例であると思いました。アキニレ粉末の不思議にサイエンスの力がどこまで迫れるのか、見学会メンバーの皆さんも興味津々の表情です（写真2）。

当研究会では、このような文化財に関連する見学会を随時開催しております。ご興味のある方は、(社)日本木材学会のHPをご覧ください。



写真 1. 飛雲閣の見学



写真 2. アキニレ樹皮・粉末の観察